

## 宮の縁起物 黄鮒の由来

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



神棚に飾られた黄鮒



黄鮒作りに励む小川正信氏

最近全国各地でコミュニティバスの運行が盛んだ。小型バスを使用することにより、街中を縦横に走り住民の利用に供している。宇都宮市内でもこのコミュニティバスが運行されている。愛称を「きぶなバス」という。車体に黄鮒の絵が描いてあるからすぐわかる。黄色に彩られずんぐりした愛嬌のある姿は、なんとも微笑ましく、市民に親しまれるコミュニティバスの愛称にぴったりだ。

黄鮒は、もともと宇都宮に伝わる縁起物である。宇都宮市教育委員会編の『宇都宮の民話』によれば、「あるとき、宇都宮に天然痘が大流行したことがあった。むかしのころなので、良い薬もなく人々は、なりゆきにまかす以外に方法がなかった。ところがある人が田川にすむ黄色の鮒を食べたところ不思議にも天然痘がなおってしまっただけでなく、黄鮒を食べた人は病気にかからなかったという。しかし、黄鮒はそう

簡単に釣れるものではなかった。そこで張り子の黄鮒を作って今年も病気にかからぬようと年の初め、軒下につるし、後に神棚に供えて無病息災を願う習慣が生じて今日にいたっている」とある。

黄鮒はもともと宇都宮城下の南西部、旧日光街道の出入り口に位置する南新町の農家が、農閑期の副業として作ったものである。それを旧暦一月十一日上河原で行われる初市に、作りたてを持って行き縁起物として売ったものである。

黄鮒は張り子で出来ており、胴体は黄色、顔は赤色、胸びれと背びれ、尾びれは、緑色と黒色で彩色されている。初市では、この張り子の黄鮒を細長い竹の先に吊るして販売される。

黄鮒は「きぶなバス」だけでなく、携帯ストラップ、キーホルダー、土鈴などにも形を変えて作られ、折り紙も考案され、さらには最中にもなっ

いるほど、今ではすっかり宇都宮市民に定着している。しかし、ここまですべて黄鮒が愛されるようになった裏には、黄鮒を絶やすまいと、黄鮒作りにあたりつてきた職人の活躍があったことを忘れてはならない。

前述したように黄鮒は、もともと南新町の農家が副業として作っていたが、昭和初期に衰退した。これを引き受けたのが当時西原町に住んでいた浅川仁太郎ならびに俊夫親子であり、浅川仁太郎亡き後は、小川正信氏が黄鮒作りの主力を担ってきた。

小川正信氏の家は、もともと干瓢およびふくべ細工を扱う商家である。高校卒業後、父を継いで家業の見習いをはじめたが、ふくべ細工職人が少なくなったために、ふくべ細工の技術を身に着け職人になったものである。そうした矢先に浅川仁太郎が亡くなり、黄鮒の消滅を危惧する人たちの後押しを受け、正信氏も黄鮒作りに加わったという次第である。その後、名実ともに黄鮒作り後継者となった正信氏は、従来の黄鮒だけでなくさまざまなものに応用し、新たな黄鮒の展開をはかった。それが次第に市民の間に普及し、宇都宮のシンボリック的存在になったのである。

一時は絶滅危惧種になりかけた黄鮒であったが、今や生息数を回復し、絶滅を免れた。この愛すべき黄鮒を、絶やさないためにも小川正信氏の後継者の出現が期待される。